中華民国前期山東省における食糧事情の構造的把握

弁　納　才　一

はじめに

中国は，淮水（淮河）を境として，北部は小麦作地で，南部は水稲作地となっているが，1940年の調査に「山東農民は平時小麦を常食としない，俗に「南人は米を食し，北人は麦を食す」とあるけれど，これは人口の大多数を占める農民を除外しての話で」[1)]あると記されているように，20世紀前半には小麦の主要な生産地だった山東省でも小麦が必ずしも一般庶民の主食とはなっていなかった。このことから，山東省の農民の多くは，貧しさの故に小麦の代わりに雑穀を食し，また，苦力として東北へ出稼ぎに出ていたと考えられてきた。

しかし，近年，以上のような捉え方に批判的な見方が提起されるようになり[2)]，筆者も疑問を抱くようになった。

ところで，中華民国前期（1912～37年）の山東省農村経済に関する資料は，1910～20年代に関するものが少なかったのに対して，1930年代に関するものは比較的多かった上に穀物や食糧への関心もより一層強くなったように見える[3)]が，中華民国前期山東省の食糧事情（食糧の生産・流通・消費を含む総合的かつ構造的な状況）を本格的に論じた研究は皆無である。ただし，中華民国後期（1937～49年）の日中戦争期における山東省食糧事情についてはすでに論じた[4)]。

そこで，本稿では，まず中華民国前期山東省の食糧消費状況を検証することから始め，ついで，そのような状況を生み出していた背景を探るために，食糧の需給と流動の状況について検証し，さらに，食糧の生産状況について検証することによって山東省の食糧事情を農村経済構造との関わりから明ら

かにしたい。そして，近代山東省農村経済の構造とその展開がどのような特質を持っていたのかを考える手掛かりとし，さらに，農村経済の展開との関係から豊かさ・貧しさとは何かについても再考してみたい。

なお，本稿では，煩雑さを避けるために，資料などからの引用部分も含めて，原則として算用数字と常用漢字を用いることにした。

Ⅰ　食糧の消費と移入

⑴　食糧の消費と需給

1918年の報告書では，山東省への日本人の移住とともに山東省の「土民間ニモ米食ヲ好ムノ傾向ヲ生シ」つつあるとしているが[5]，逆に，このことから中華民国前期に山東省の一般民衆にとって米が主食ではなかったことを窺い知ることができる。

一方，小麦(粉)について，1917年の報告書では，小麦粉は山東省の主要な食糧で，「素麺，麺麴，澱粉，餛飩，麩，菓子，糊等其用途頗ル多」く，その他にも「餅子，包子，饃々，麺湯，油条子，麻花児等トシテ食用ニ供ス」ると同時に，小麦の碾き殻である麬(麩)は家畜・家禽の飼料だったが[6]，窮民は麬も食用としていたという[7]。そして，『山東之物産』第7編(1922年)では，小麦が最優良の食料品として「専ラ上流若ハ中流社会」で消費されたのに対して，下層民の主食は粟・高粱・豆で，「時ニ小麦粉ヲ混用スルニ過キス」としており[8]，『山東省ノ経済発展』(1915年)でも，山東省の下層民の重要な食用品は高粱･黍稷で，「小麦及ヒ上等玉蜀黍等ニ至リテハ唯タ富有者ノ卓上ニ上ルノミ」であるとし[9]，小麦が「農家ノ自給的穀類トシテノ一面ト共ニ，商品的穀類トシテノ半面ヲ持テヰル」のに対して，粟は純粋に自給的穀類として栽培されていたという[10]。あるいは，『中国実業誌(山東省)』(1934年)によれば，小麦粉は高価なので，山東省の農民の多くは小麦を売り，東部では甘藷を食べ，西部では高粱・玉蜀黍・粟を主食としていたという[11]。

ちなみに，山東省東部の膠県第3区耕樂郷張耀屯では，1935年の調査報告書によれば，「小麦は最も多量に生産さるゝも，高価なるが故にこれを売却して現金に換ふるを原則とし」ていたが，「小麦収穫後は農家は漸く穀物(粟，高

粱）の払底を来たし，而も麦秋の節は小麦の価格下落するを以て，これを売りて他の穀物を買ふは却つて不得策なるが故に，貧富を問はず，この節より小麦が食用として著しく多量に消費され」た。よって，食糧として穀物中で主位を占めたのは粟だったが，次位を占めたのは小麦で，「小麦粉の1番粉は，正月，節句，来客に用ひ，常時に用ふるは麩の細末を混ぜる黒色の粉にして，貧困なるものは麩も悉く磨砕して」食した。ただし，食糧全体の中で穀物が占める割合は52.2％で，「残余の47.8％は甘藷を以て充当され」ており，甘藷は「重要なる食用作物」となっていた[12)]。

また，青島市近郊の李村では，『李村要覧』（1916年）によると，同村内で最も生産量の多かった甘藷を常食とし，甘藷についで生産量が多かった小麦は高粱とともに「高等ノ食糧」と見なされていた。いずれにせよ，小麦・高粱・大麦・粟・稗・玉蜀黍・黍・蕎麦などの穀物や大豆・緑豆・豌豆などの豆類は炊くか煮るか，あるいは，基本的には粉末にして主に麺や饅頭・餃子・餅にして食されていた[13)]。

さらに，1914年の報告によれば，山東省東部の芝罘（煙台）の田舎では冬期に貧農が切干甘藷を食し[14)]，あるいは，1918年刊行の報告書によれば，同じく山東省東部の日照県石臼所では生産された干甘藷が農漁民の食料だったという[15)]。

ところが，1924年5月の新聞記事には，「近年日本の物価騰貴に伴ひ比較的安価なる支那諸物資の対日輸出増加し」，山東省の農民が主「食を他物資に替へても干薯を市場に出す」ようになったとあり[16)]，1920年代には甘藷までもが販売目的で生産されるようになっていた。

一方，『山東之物産』第2編（1917年）では，「機械製麦粉ノ輸入増加シ之レヲ賞用スル」者が漸増したことを山東省民の「生活程度ノ向上セルヲ語ルモノ」であると見なしており[17)]，第一次世界大戦期に山東省の経済状況が好転したことを窺い知ることができる。

以上のように，20世紀前半の山東省では小麦粉に対する需要が増加していたという指摘も見られるが，小麦は主に富裕層の主食で，一般民衆は粟・高粱・豆類などを主食とし，あるいは，貧困層は甘藷を主食とし，さらに，極貧層は本来は飼料である小麦の碾き殻までも食べていた。また，小麦生産農家も小麦を販売して粟や高粱などを購入して食糧としており，山東省では小麦は

自家消費用の自給食物としてではなく，販売目的の商品作物として栽培されており，食糧を自給していない農家が多数いた。

以上の状況から，中華民国前期山東省において多段階的・連鎖的な食糧消費構造が形成されていたことの一端をも窺い知ることができる。

さて，山東省において食糧となる穀物の生産と消費にズレが生じていたとすれば，その需要と供給の関係はいかなるものだったのだろうか。

『山東省ノ経済的発展』(1915年)では，「穀粉輸入額ハ山東ノ小麦収穫ノ如何ニ依リテ著シキ高低アリ」，凶作となった1905～07年には「米国穀粉ノ輸入甚タ増加」したが，平時には「敢テ穀物ノ供給ヲ外国ニ仰ク事ヲ要セス」としており[18]，また，『山東之物産』第2編(1917年)では，小麦は山東省各地で栽培されるが，東部の半島部は「山地帯ナルト且ツ地味痩薄ナル」ために生産量が僅少で，住民の需要を充たすことができなかったのに対して，北部・西部は平地が多くて地味が肥沃なために生産量も多く，常に半島部へ供給していたが，山東省全体では毎年大量の小麦粉を移入していたとしている[19]。

このように，山東省の食糧は，北部・西部ではやや余剰があったが，東部では不足していたために，省全体としては移入に頼らざるをえなかった。それでは，以下において1917～20年頃の調査報告から食糧需給状況を各県ごとに見ておきたい。

東部の日照県では，紅石崖における移入品の筆頭に約3.5万包の小麦粉が挙げられ[20]，他方，農漁民が干甘藷を主食としていた石臼所からは豊作の年に豆類・麦類・高粱を移出していた[21]。また，農産物が乏しく，粟・玉蜀黍を移入していた博山県では，高粱を主に酒造に用いたり[22]，あるいは，同県は「山岳重疊平地ニ乏シク」，「日常ノ糧食多クハ他地方ノ供給ニ待ツ」という状況にあったものの，「年中労働ヲ続ケ絶エス収入ノ途アルヲ以テ農村ハ比較的富裕ニシテ購買力ニ富」んでいたとも言われている[23]。一方，人口が稠密だった黄県は土地が肥沃で「農耕普シト雖穀類ハ年々之ヲ満州ヨリノ移入ニ仰」がざるをえず，他方，半島部の蓬莱県は「丘陵高地僻壌ニシテ物資豊富ナラス」，「穀類ハ多ク遼東ヨリ輸入」していた[24]。

そして，膠済線沿線や中部でもほぼ同様の状況が見られた。すなわち，黄県と同じく地味の肥沃な青州(益都県)は，「五穀豊熟スト雖人口ノ増加スルニ

随ヒ管内ノ農作品ノミヲ以テシテハ遂ニ不足ヲ感スルニ至リ近年高粱，粟等ノ輸入少カラス」[25]とされており，また，高密県も「土地豊饒ニシテ小麦，甘藷，粟，野菜等ニ適スルモ土地狭隘人口稠密且ツ年々水害アルヲ以テ其ノ農産物ハ以テ県内ノ需要ニ応スル能ハス之ヲ他県ノ供給ニ仰クコト多大ニシテ麦類，大豆，高粱等輸入多」かった[26]。さらに，人口の稠密な安邱県・諸城県・莒州・臨沂県・沂水県では，小麦・穀物が「往々不足」するか「辛ウシテ地方住民ヲ養フニ足ルノミ」で，臨沂県では穀物を移入することが多く，新泰県では「多少小麦ノ移出ヲ見シモ雑穀ハ概ネ不足勝」で，蒙陰県では「漸ク地方住民ヲ養フニ足リ凶年ニハ高粱等ノ逆移セラルルコト稀ナラス」としている[27]。他にも，「地味概ネ肥沃ナ」泗水県は「雑穀ノ産出蓋シ侮ルヘカラサルモノア」り，特に小麦は良質で，その７～８割を手打粉として移出する一方で，住民の食料として粟・高粱を移入していた。また，隣接する新泰県汶河平野は地味が肥沃で，特に小麦の栽培が可耕地の約５割を占め，粟は約３割５分を占め，多少は移出され，さらに，曲阜県でも約10分の１の小麦を手打粉にして移出していた[28]。

以上のように，山東省の農村には土地が痩せて穀物類が充分には生産できなかった地域もあったが，酒造の原料として穀物が消費されることもあったことや人口の増加による食糧に対する需要の高まり，あるいは自家消費分をも犠牲にした小麦（粉）の販売などによって地味が肥沃だった地域でも食糧が不足することもあった。食糧価格は高価な順に，米・小麦，高粱・粟，玉蜀黍やその他の雑穀・豆類，甘藷，小麦の碾き殻となっており，上位のものを主食とする者ほど豊かで，逆に，下位のものを主食とする者ほど貧しいと見なされてきた。

だが，甘藷を主食とする東部農村とりわけ青島近郊農村が高粱・玉蜀黍・粟を主食とする西部農村よりも経済発展が遅れており，また，北部・西部から小麦を移入せざるをえなかった半島部・東部の農村は北部・西部よりも経済発展が遅れていたと見なしてよいだろうか。

小麦の碾き殻をも食用とせざるをえなかった貧しい農民が多数存在していたことは農村経済の遅れを表しているのではなく，農村経済の発展の一面を表していると見るべきである。すなわち，多段階的・連鎖的な食糧消費構造の形成

と農村における食糧の購入は，農村経済の発展によって穀物さえも商品作物として生産されるほどまでに商品経済が広範に展開した結果の表れと見なすべきである。

⑵　食糧の流動

山東省の中でも食糧が不足しがちだった東部では，主に西部からの穀物の移入に頼っていたとされているが，その具体的な状況を以下に見ておきたい。

1913年に山東鉄道（膠済線）によって輸送された小麦6,193.13トンのうち，4,305.33トンが西部の済南から発送され，特に豊作だった1915年は７月１日～27日のわずか１カ月足らずの間だけでも禹城・長清・泰安・大站口・済寧付近一帯を主産地とする済南から4,170.4トンが発送され，「小麦の東部に於ける窮乏を西部の過多を以て補」ったと言われている[29)]。そして，1937年以前に済南に出廻っていた小麦は，津浦線（仕出地は泰安・大汶口・兗州・済寧・滕県・徐州・蚌埠・開封など）と北津浦線（仕出地は平原・万城付近）から集まり，膠済線沿線では「青州以西地区カ済南市場ノ勢力圏内ニアリ，青州以東ノモノハ青島ニ出回ツテヰタガ，相場ノ良好ナ場合ハ済南ノ勢力ハ高密地区マデ伸ビ」，この他にも，「黄河及小清河ノ舟運」によって河南省の洛口と山東省済南市近郊の黄台橋に相当量が出廻ったという[30)]。

ただし，日中戦争前には，平年における益都県内の主要な食糧総生産量の82％までが県内で消費され，食糧移出の「最高限度は生産総量の約18％程度に過ぎ」ず，益都地方では大豆が主要な移入食糧であり，小麦が主要な移出食糧になっていたという[31)]。

ちなみに，1936年度に膠済線の各駅に集まった小麦は5.7万トン余り（約97万担）に達し，最大の青州（益都）で11,500トン余り，ついで昌楽県・黄台橋で各約6,000トンに上り，主に済南（3.5万トン余り）と青島に供給されたが，山東省南部から済南に出廻る小麦の大部分は水運によるもので，鉄道によるものは20％にも及ばなかった。また，粟の移出量が多い県は莱陽・諸城・長山・済陽・商河・臨邑・徳県・平原・禹城などで，その集散地は棲霞・博山・徑川・済南・天津などで，高粱の主要な移出県は諸城・昌楽・博興・高苑・長山・鄒平・商河・徳県・平原・歴城などで，逆に，その主要な移入県は膠県・博山・桓

台・徑川・周村・張邱などで，最大の発送駅は全輸送量約42,800トンのうちの41,000トン余りを占める青島付近の大港と大港碼頭で，一方，最大の到着駅は31,500トンの済南で，大連から大港へ輸送された「満州」産の高梁の大部分が膠済線によって済南に卸された。さらに，大豆の移出余力がある県は即墨・平度・高密・諸城・寿光・長山・徳県・済河などで，膠済線の大豆総輸送量1.4万トン余りのうち最大の発送駅は7,000トン余りの済南で，ついで周村・大港碼頭で各3,000トン余りに上り，一方，到着駅としては，濰県蛤鶊屯が第1位で，岞山と青島が第2位だった。そして，玉蜀黍の主要な移出県は平原・徳県・商河・歴城などで，主に隣県や済南に移出されたが，従来から山東省では玉蜀黍の供給を大連に仰ぎ，甘藷は即墨産が青島・済陽に，歴城産が済南に，徳県産が天津に移出されたという[32)]。

それでは，次に，1936年においてさえ山東省南部から済南に出回る小麦の大部分を占めていたとされる水運のうち，「黄河及小清河ノ舟運」について見てみたい。

1917年6月の調査によれば，小清河の河口に位置する羊角溝では，人口密度が高く，不作も続いていたために，雑穀は「満州」や河南省から移入し，済南相場と羊角溝相場の高低によって絶えず小清河を上下していたが，済南市場の勢力はほぼ岔河以西にとどまり，岔河以東の索鎮・桓台・広饒・博興・寿光などが羊角溝の勢力範囲となっていて，羊角溝に移入された高梁の多くは大連・営口・安東・貔子窩などの「満州」産で，これに玉蜀黍がつぎ，また，羊角溝からの移出品の筆頭に雑穀が挙げられ，高梁・緑豆・大豆・玉蜀黍・小麦などは山東省西部の東阿附近産と河南省洛口から黄台橋に来る河南省北部産及び小清河中流域産のもので，その仕向地は龍口・煙台・関東州などで，年額200万担に及ぶこともあったが，不作が続いた1910年代前半は，逆に「満州」から移入し，下営・大連などに移出される小麦も羊角溝経由品だった[33)]。そして，1919年に刊行された報告書にも，羊角溝への移入品について類似の記述が見られるが，雑穀は小清河中流域が豊作の時はほとんど移入されず，逆に，年に約10万担の高梁・緑豆・大豆・玉蜀黍・小麦が龍口・芝罘・関東州などへ移出されたという[34)]。

また，1917年8月の調査によれば，「済南ノ門戸」たる黄台橋は，「古来煙台，

龍口ト済南トヲ連絡スル最短貿易路ニシテ民船貿易頗ル盛況ヲ呈シタ」が，小清河の所々で堤防が崩壊し，川床も漸次泥塞した上に，ドイツの膠州湾・山東鉄道の経営が「辛辣ヲ極メ」たために，大打撃を蒙ったという。1917年度に黄台橋に集まった高粱の大部分は天津経由品が全体の８割を占め，山東省西部の東阿地方産と黄河水運による河南省洛口経由品は２割にすぎず，小清河下流域の主な仕向地は章邱・斉東で，時には湾頭・柳橋にまで及び，小麦は東阿・臨清などの黄河沿岸及び江蘇省・「満州」産で，多くは鴨旺口・帰蘇鎮・位家橋・李家墳・家鎮・陶唐口・章邱・鄒平・歴城・長山などの小清河上流域で消費され，粟は黄河沿岸産で洛口から来たものが多かったが，1917年春以降，市価の高騰によって小清河流域への荷動きが小さくなり，逆に，江蘇省浦口（津浦線の終点駅で，南京の長江対岸）から来た米が粟よりも割安となったために小清河流域にも仕向けられて粟や高粱に混ぜて食べられるようになり，貧民でさえも米を食べたとされている[35)]。ただし，いずれにせよ，大量の高粱と小麦が黄台橋を経由して小清河流域へ仕向けられていたことがわかる（**表１**を参照）。

しかも，1917年には小清河の上流域・中流域・下流域で各々100万担前後の穀物が移出されていたが，その移出量は小麦よりも高粱･粟がはるかに多かった（**表２**を参照）。また，これを**表１**とつき合わせて見てみると，済南市近郊の黄台橋からの仕出量を超過する高粱と粟が小清河流域各県から移出されていたことがわかる。

表１．1917年度黄台橋における穀物の流動

高粱	８割が「満州」産天津経由品，２割が東阿・洛口経由品⇒60万担	
	【仕向地】小清河上流域の章邱・斉東を主とし，時には湾頭・柳橋	
小麦	東阿・臨清などの黄河沿岸各地産，江蘇省産，「満州」産⇒50万担	
	【仕向地】鴨旺口・帰蘇鎮・位家橋・李家墳・孫家鎮・陶唐口小清河上流域の章邱・鄒平・歴城・長山	
大豆	約７割が河北省産，約３割が東阿付近産⇒５万石	
	【仕向地】大部分が小清河中流域の桓台・索鎮，一部が羊角溝	
粟	河南省洛口経由品⇒２～３万担	【仕向地】小清河流域
米	江蘇省江浦県浦口産⇒3.5～４万担	【仕向地】小清河流域

典拠）青島守備軍民政部鉄道部「小清河ノ水運ト羊角溝（1917年８月調）」調査資料第21輯（1921年）269～271頁より作成。１担は60kg。

表２．1917年小清河流域各県における穀物等の移出量

（単位：万担）

		小麦	高粱	粟	豆	計
上流域	歴城	6.7	23.1	12.6	9.1	51.5
	章邱	11.9	15.5	18.4	4.4	50.2
	鄒平	1.3	3.8	4.4	2.4	11.9
	斉東	2	3.9	1.8	3.9	11.6
	青城	0.4	4.4	2.8	2.6	10.2
	小計	22.3	50.7	40	22.4	135.4
中流域	桓台	14.8	16.7	4.8	10.3	46.6
	高苑	3.8	3.4	1.6	2.9	11.7
	博興	5.4	13.6	2.6	6.1	27.7
	広饒	2.5	6	2	0.6	11.1
	小計	26.5	39.7	11	19.9	97.1
下流域	寿光	16	42	43	2	103
合計		64.8	132.4	94	44.4	335.5

典拠）「小清河ノ水運ト羊角溝（1917年８月調）」284～292頁より作成。なお，寿光県は「北に利津・霑化，蒲台などの黄河下流地方を控える」とされている。

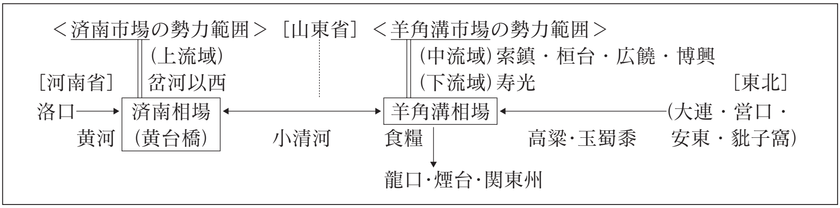


図１．小清河流域を中心として見た穀物の流動

このように，中華民国初期には河南省洛口から済南へ流入した穀物は，さらに済南市近郊の黄台橋から小清河を通じて龍口・煙台さらに関東州へも仕向けられることもあった。そして，以上に述べてきた状況を簡潔にまとめたのが図１である。

済南は，1937年以前には華北第一の小麦粉の生産地であり，その原料小麦は山東省のみならず，遠く河北省南部や河南省・安徽省北部からも大量に出廻っており，同時に，雑穀の集散量も多かったという[36]。また，龍口においても移輸入の大部分を占めたのは穀物だった[37]。

以上から，穀物が山東省内ばかりでなく，河南省・安徽省・江蘇省・天津・

東北との間で広範囲に流動していたことがわかる。すなわち，以上のような広範な地域における雑穀の生産量と価格の相互関係によって農産物の流れが決定していた。

ところで，近代山東省で最初の開港場となった芝罘では，1911～15年における小麦粉の移輸入量は約20～30万担で，玉蜀黍・粟・高粱などの雑穀の移輸入量よりも圧倒的に多かったが，1914年から外国製小麦の輸入量は激減したのに対して，1913年から中国製小麦の移入量が激増していった（**表３－１**を参照）。

表３－１．1911～20年における芝罘への穀物・小麦粉の移輸入動向

（単位：担）

年度	玉蜀黍			粟･高粱	小麦	小麦粉		
	輸入	移入	合計	移入	移入	輸入	移入	合計
1911	−	−	−	−	−	100,735	103,795	204,530
1912	−	−	−	−	−	167,691	103,978	271,669
1913	0	33,384	33,384	1,552	2,553	107,357	189,806	297,163
1914	0	952	952	12,582	238	60,326	164,002	224,328
1915	0	48,401	48,401	92,514	28,360	658	285,727	286,385
1916	0	23,008	23,008	22,760	4,272	629	340,864	341,493
1917	0	41,466	41,466	48,278	7,559	550	391,559	392,109
1918	34,846	18,158	53,004	23,876	0	470	210,220	210,690
1919	0	39,030	39,030	19,461	7,113	10,771	260,556	271,327
1920	3,337	78,673	82,010	59,941	5,128	5,926	171,936	177,862

典拠）中国第二歴史檔案館・中国海関総署辦公庁『中国旧海関史料（1958～1949）』（京華出版社，2001年）より作成。

表３－２．1915～20年における龍口への穀物・小麦粉の移輸入動向

（単位：担）

年度	移入			小麦粉		
	玉蜀黍	粟･高粱	小麦	輸入	移入	合計
1915	2,129	1,315	0	0	3,057	3,057
1916	50,670	50,672	266	0	36,078	36,078
1917	39,385	48,012	7,577	0	77,947	77,947
1918	45,629	80,642	538	0	30,635	30,635
1919	22,340	12,557	32	0	8,625	8,625
1920	42,818	60,384	1,706	1,559	25,355	26,914

典拠）**表３－１**に同じ。ただし，1915年は11～12月の２ヶ月分のみ。

また，龍口では，1915～20年のうち，1915～19年には小麦粉が全く輸入されなかったが，1916年からは穀物・小麦粉の移入量が急増し，また，1915年と1917年を除くと，小麦・小麦粉よりも玉蜀黍・粟・高粱などの移入量が多かった（表３－２を参照）。

さらに，1915～20年の間に1916年から青島への穀物・小麦粉の移入量が急増し，1917年には激増しているが，粟・高粱の移入量は1917年に100万担を超えてピークをむかえ，その前後を含む1916～18年には玉蜀黍・小麦粉の移輸入量をはるかに凌駕し，玉蜀黍の移入量は1917年に17万担を超えて突出し，小麦粉の移入量は1916～19年に14万担前後に達するなど，変動が極めて激しかった（表３－３を参照）。

このように，第一次世界大戦期に山東省の主要な各港において小麦粉の移入量が輸入量をはるかに超過するようになっていたのは，第一次世界大戦の勃発によって小麦粉の輸入圧力が急激に低下したことと中国国内における機械製粉の能力が向上したこと（近代機械製粉業の発展）を反映していたと考えられる。

以上のことから，中華民国前期の山東省内では，小麦・小麦粉や雑穀の獲得・確保をめぐって小清河流域と膠済線沿線において激しいせめぎ合いが展開されていたことを窺い知ることができる。そして，当該時期の山東省農村がいかに深く商品経済に組み込まれ，大量の食糧作物が商品として山東省境をも越えて河南省・安徽省・江蘇省・天津・東北などの周辺地域との間で広範囲に流動していたかを窺い知ることができた。この点からも，農業生産を県や

表３－３．1915～20年における青島への穀物・小麦粉の移輸入動向

（単位：担）

年度	玉蜀黍			粟･高粱	小麦	小麦粉		
	輸入	移入	合計	移入	移入	輸入	移入	合計
1915	0	0	0	0	0	247	4,764	5,011
1916	0	0	0	113,157	0	1,287	15,730	17,017
1917	0	173,438	173,438	1,072,918	0	51,639	137,625	189,264
1918	998	40,151	41,149	474,264	0	391	159,469	159,860
1919	0	0	0	40,081	0	299	134,323	134,622
1920	0	782	782	66,541	5,453	1,677	74,656	76,333

典拠）表３－１に同じ。ただし，1915年は９～12月の４ヶ月分のみ。

省の境域内で閉鎖的に分析するのではなく，広域的かつ構造的に捉える必要性があることを強く感じる。

II　食用農産物の生産

(1)　概　　略

1937年以前の統計数値が残っている範囲内で，山東省内で生産された主要な食糧作物だった小麦・高粱・粟・甘藷の生産量について，中国全体の中に占める山東省の位置を確認しておきたい。

まず，各省ごとの中華民国前期における小麦の生産量を見てみると，山東省が河南省についで華北の中でも主要な小麦の生産地だったことがわかる（表４－１を参照）。

1937年以前には山東省の年間小麦生産量は河南省につぐ全国第２位の14%を占め，作付面積では第１位だったとされており[38]，また，華北の小麦生産量の30%を占め，「山東省ノ穀倉」と称されている曹州・兗済両道が作付・収量ともに最も多く，この両道が山東省で占める割合は，作付面積で31%，収

表４－１．主要な省における小麦の生産量　　（単位：万市担）

年度	河南省	山東省	江蘇省	河北省	四川省	安徽省	湖北省	山西省	陝西省	浙江省
1914	417.0	7,787.0	2,092.1	1,252.2	18,170.7?	1,029.5	1,968.6	1,511.7	1,306.5	553.2
1915	418.5	4,605.0	2,947.5	1,174.2	－	637.7	2,040.6	－	1,455.5	534.5
1916	29,555.4?	2,422.4	2,329.1	1,342.8	－	1,086.9	3,823.8	3,657.0	1,129.2	1,281.5
1918	36,718.2?	312.3?	3,038.6	1,398.8	－	888.8	2,876.7	1,157.1	1,780.5	633.8
1924~29	7,419.9	7,293.1	6,626.2	3,656.1	3,158.6	3,170.1	3,426.0	2,061.8	2,238.5	1,401.5
1931	8,177.5	7,699.9	6,506.4	3,846.5	3,628.7	2,844.4	2,630.3	1,318.5	1,189.2	1,212.6
1932	8,814.2	7,965.2	6,446.2	4,210.2	4,033.1	2,770.1	2,741.3	1,668.5	854.3	1,218.9
1933	9,672.1	7,576.0	5,608.2	4,912.6	3,612.2	2,920.2	2,775.8	1,839.8	1,091.0	978.0
1934	8,109.1	7,347.0	6,135.2	3,873.9	3,700.1	3,213.1	2,356.2	2,102.4	2,353.5	1,010.9
1935	7,898.5	6,729.7	5,743.4	3,776.9	3,706.7	2,681.8	2,480.3	1,726.5	2,412.9	884.1
1936	10,541.4	7,102.1	5,475.2	3,065.6	3,839.5	3,372.9	3,012.2	1,915.1	1,775.8	995.1
1937	3,744.4	5,773.3	5,360.5	1,877.3	2,860.2	2,011.7	2,122.7	1.283.5	942.9	1,146.0

典拠）許道夫編『中国近代農業生産及貿易統計資料』（上海人民出版社，1983年）13～86頁より作成。１市担＝100kg。なお，表中の「－」はデータがないことを，また，「?」は数値の正確さに疑問があることを示している。

穫高で32%だった[39]。とりわけ山東省西部の済寧地方とその奥地一帯は上海市場で「所謂山東小麦と称せらるゝ全省第一の小麦の産地」だった[40]。

次に，高粱の生産量を見てみると，中華民国前期において高粱は東北（とりわけ遼寧省）と華北に主要な生産地が集中しているが，華北の中では山東省が最も多く，山東省は高粱の主要な生産地だった（表４－２を参照）。

さらに，粟の生産量を見てみると，高粱と同様に東北と華北に主要な生産地が集中しているが，その中でも山東省が最も多く，山東省は粟の主要な生

表４－２．主要な省における高粱の生産量

（単位：万市担）

年度	遼寧省	山東省	河南省	河北省	山西省
1914	3,890.7	7,340.5	900.6	1,560.2	456.5
1915	3,890.7	5,241.9	643.4	1,541.8	286.0
1916	4,258.3	2,230.0	28,829.8?	1,874.3	1,208.2
1918	4,092.6	2,696.2	414.5	1,527.7	2,193.1
1924~29	5,605.7	4,344.8	2,347.0	3,043.0	1,483.8
1931	－	4,459.0	1,875.0	2,105.8	907.4
1932	－	4,159.2	2,306.2	2,325.6	1,304.5
1933	－	3,677.9	2,326.7	2,020.6	931.1
1934	－	3,473.3	2,374.4	1,845.4	951.9
1935	－	3,486.9	2,302.5	1,732.2	794.9
1936	－	4,251.4	2,250.9	2,427.9	825.1
1937	－	3,539.8	2,527.9	1,585.1	913.5

典拠）表４－１に同じ。

表４－３．主要な省における粟の生産量　（単位：万市担）

年度	河北省	山東省	河南省	山西省	吉林省	遼寧省	黒竜江省	熱河省
1918	1,178.0	1,451.6	16,166.7	6,643.5	290.1	117.3	384.9	303.0
1924~29	3,947.8	4,492.9	2,789.7	2,511.7	2,385.6	2,046.4	1,916.4	1,191.0
1931	3,258.7	3,761.7	2,196.1	1,542.0	5,966.0			
1932	3,210.0	3,672.3	2,302.6	1,675.4	5,270.0			
1933	2,803.3	3,726.7	2,335.2	1,551.2	6,368.0			
1934	3,081.7	3,889.7	2,736.0	1,593.2	4,246.0			
1935	3,009.9	3,563.8	2,937.0	1,366.6	5,936.0			
1936	3,617.1	3,964.4	1,641.6	1,548.4	6,374.0			
1937	2,464.1	3,205.9	2,099.4	1,508.1	5,890.0			

典拠）表４－１に同じ。

表４－４．主要な省における甘藷の生産量　（単位：万市担）

年度	河北省	山東省	河南省	江蘇省	浙江省	湖南省	福建省	広東省	四川省
1924~29	1,560.3	2,439.7	2,822.9	4,372.0	1,522.0	2,286.1	1,941.9	2,074.0	7,151.5
1931	3,363.1	4,308.0	3,034.9	3,446.3	1,614.7	1,897.3	1,992.9	3,941.8	5,021.2
1932	3,885.7	4,091.2	3,677.5	5,013.8	1,680.8	2,518.7	2,178.4	4,106.1	4,773.0
1933	2,665.6	5,060.0	6,241.6	4,044.7	1,549.0	2,290.9	2,050.6	3,884.5	4,477.5
1934	3,050.3	4,617.9	5,363.5	2,705.4	829.2	1,732.4	2,027.0	4,052.9	4,611.7
1935	2,892.2	4,503.0	5,139.1	4,290.3	2,058.7	3,247.6	2,409.9	3,993.5	4,143.1
1936	2,915.4	4,972.4	3,330.5	3,834.1	1,304.5	2,710.0	2,076.9	3,445.5	4,604.2
1937	2,618.6	4,180.1	5,227.7	3,874.2	2,282.3	2,505.7	2,949.2	4,193.0	8,527.2

典拠）**表４－１**に同じ。

産地だった（**表４－３**を参照）。

なお，甘藷の生産量についても，山東省は河南省・江蘇省・広東省・四川省などと並んで主要な生産地の１つとなっていた（**表４－４**を参照）。

以上から，山東省は米を除く主要な食糧作物の生産量が中国の中で最も多かったことがわかる。この点では，中華民国前期の山東省は農業生産が盛んだったとも言える。

それでは，山東省ではいかなる作付け状況になっていたのだろうか。『中国実業誌（山東省）』（1934年）によると，1930年代初頭の山東省における栽培面積・生産量は，白菜・葱・大蒜・大根の蔬菜類が約42万市畝・約928万市担，落花生・棉花・葉煙草が合計約1,049万市畝・約1,788万市担だったのに対して，主食となっていた小麦（約4,094万市畝・約4,892万市担）・高粱（約1,906万市畝，約3,493万市担）・粟（約1,733万市畝・約3,609万市担）・玉蜀黍（約615万市畝・約1,101万市担）・甘藷（約292万市畝・約4,047万市担）・大豆（約2,640万市畝・約3,518万市担）が圧倒的に多く，小麦の栽培面積は高粱・粟の約２倍となっていた。１畝当たりの生産量は，最も多い甘薯が約13.85市担で，約1.19市担だった小麦の11倍強にも達し，高粱が約1.83市担，粟が約2.08市担，玉蜀黍が約1.79市担，大豆が約1.33市担だった。しかも，移出量の割合は，商品作物とされる落花生・棉花・葉煙草が各々55.8％・70.99％・39.19％と相対的に高かったのに対して，高粱・玉蜀黍・粟・甘藷が各々2.43％・4.37％・０％・2.87％と相対的に低かったが，小麦・大豆は各々29.52％・31.19％と相対的に

高かった[41]。

よって，山東省では小麦と大豆も販売目的の商品作物となっていたと言える。なお，山東省の特産品の粉条（粉糸・粉干）[42]の原料である緑豆は，移出量の生産量に占める割合が約13.2％となっており，移出量が最も多い斉東では43.3万担のうち17.3万担が移出されていた。

そこで，以下では，1930年代初頭の山東省において輪作体系の中心をなしていた小麦・高粱・粟・玉蜀黍・甘藷・大豆の生産状況を各県ごとに見ておきたい。

小麦の生産量が多かった県は高粱や粟の生産量でも上位を占める県が多かった。それらの主要な生産地は，西南部の滕県・魚台・単県・曹県・鉅野・鄆城，中部の鉄道沿線の歴城・章邱・益都・寿光・昌邑・濰県・泰安，半島部の膠県・平度・莱陽・諸城などだった。また，甘藷の生産地は牟平・即墨・莱陽・膠県・平度・高密・諸城・海陽・日照などの半島部に偏在していた。さらに，大豆は寿光や青島周辺の半島部の膠県・平度・諸城が多かった（表５－１及び図２を参照）。

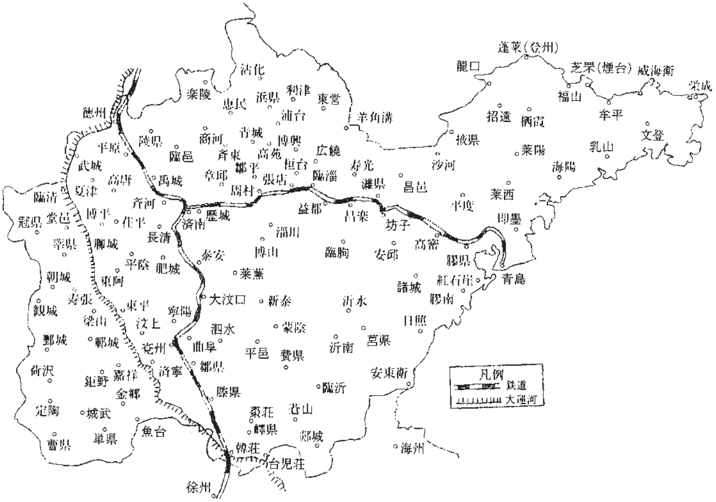
表５－１．1930年代初頭山東省主要各県の主要農産物生産量

（単位：万市担）

小　麦		高　粱		粟		玉蜀黍		甘　藷		大　豆	
泰　安	203	滕　県	174	昌　邑	210	楽　陵	126	牟　平	506	寿　光	293
平　度	177	寿　光	143	莱　陽	158	徳　県	60	即　墨	423	膠　県	262
膠　県	147	諸　城	135	平　度	132	章　邱	58	莱　陽	340	単　県	180
曹　県	129	平　度	115	諸　城	120	莱　陽	53	陽　穀	180	平　度	121
莱　陽	123	沂　水	112	寿　光	117	陽　信	50	膠　県	175	諸　城	107
歴　城	120	鄆　城	107	濰　県	109	陽　穀	45	平　度	161	鄆　城	81
魚　台	115	益　都	89	陽　信	92	冠　県	40	高　密	160	歴　城	72
寿　光	111	棲　霞	85	楽　陵	85	黄　県	37	鄆　城	160	昌　邑	71
章　邱	110	武　城	82	長　清	84	膠　県	35	諸　城	159	滕　県	68
滕　県	108	曲　阜	74	膠　県	84	招　遠	33	海　陽	150	荷　沢	66
単　県	96	博　興	71	章　邱	77	威海衛	33	滕　県	150	莱　陽	62
鉅　野	92	招　遠	66	招　遠	68	肥　城	30	日　照	140	鄄　城	62
沂　水	90	歴　城	66	安　邱	70	館　陶	25	嶧　県	140	高　苑	61
臨　沂	87	高　密	61	泰　安	64	莘　県	25	斉　東	137	即　墨	59
鄆　城	84	利　津	60	益　都	64	無　棣	24	郯　城	120	濰　県	54
濰　県	78	泰　安	59	歴　城	58	徳　平	24	文　登	105	曹　県	53
安　邱	75	臨　沂	59	利　津	57	文　登	24	滋　陽	95	清　平	50

典拠）実業部国際貿易局編『中国実業誌（山東省）』（1934年）第５編10～97頁より作成。調査は1933年７月から開始したという（同書「序」１頁）。

図２．山東省の地図



１畝当たりの生産量が平均のほぼ1.5倍以上となっている県は，小麦では膠済線周辺の臨朐・博山・青島・膠県・歴城・即墨・寿光，津浦線周辺の寧陽・臨邑・長清，北部の霑化，半島部の栄成，高粱では津浦線周辺の曲阜・寧陽，膠済線周辺の臨朐・寿光・即墨，半島部の招遠・黄県，西北部の徳平，粟では津浦線周辺の寧陽，膠済線周辺の臨朐・即墨・寿光・濰県，半島部の招遠・莱陽，西北部の楽陵，西部の清平（現在，高唐県清平鎮），玉蜀黍では半島部の海陽・黄県・栄成，西南部の曹県，膠済線周辺の寿光・膠県・青島，津浦線周辺の寧陽，西北部の楽陵，甘藷では膠済線周辺の膠県・高密・中央部の莱蕪，西部の金郷・陽穀・鄆城・徳県，半島部の牟平・莱陽，南部の嶧県，東南部の日照，北部の陽信，大豆では膠済線周辺の青島・寿光・即墨，西部の堂邑・寧陽・徳県・朝城・夏津・長清，東南部の日照・諸城，北部の徳平・霑化・利津・楽陵だった（表５－２を参照）。

以上から，寿光･臨朐より東の半島部には県全体の生産量が多い上に，１畝当たりの生産量も多い県がいくつかあり，穀倉地帯とされる西部をやや凌いでいるようにも見える。

次に，移出量の多かった県を見てみると，小麦では，済南周辺の章邱・泰

表5-2．1930年代初頭山東省主要各県における一畝当たりの生産量

（単位：市担）

小麦		高粱		粟		玉蜀黍		甘藷		大豆	
臨朐	5.20	曲阜	5	寧陽	4.5	海陽	22.5	膠県	35	青島	17
博山	3.42	臨朐	4.8	臨朐	4.01	曹県	11.5	莱蕪	32	寿光	4.77
寧陽	3.2	寿光	4.79	即墨	3.6	寿光	4.80	金郷	23	堂邑	4.40
青島	2.7	即墨	3.60	寿光	3.59	寧陽	4.5	牟平	20	日照	3.6
霑化	2.4	招遠	3.6	招遠	3.59	膠県	3.5	莱陽	20	寧陽	3
膠県	2.1	黄県	3.49	楽陵	3.54	黄県	3.49	陽穀	20	即墨	2.4
栄成	2.08	徳平	3	清平	3.5	栄成	3.36	高密	20	徳平	2.4
臨邑	2.01	寧陽	2.78	濰県	3.33	楽陵	3	鄄城	20	諸城	2.09
歴城	2	諸城	2.7	莱陽	3.3	青島	2.85	嶧県	20	霑化	2.07
即墨	1.80	蒙陰	2.7	臨邑	3.06	招遠	2.6	日照	20	利津	2
長清	1.8	沂水	2.66	黄県	3.00	徳県	2.5	徳県	20	徳県	2
寿光	1.79	滕県	2.6	昌邑	3	莘県	2.5	陽信	20	朝城	2
広饒	1.75	長清	2.5	陽信	3	寿張	2.5	禹城	19.87	楽陵	2
蒙陰	1.75	荷沢	2.4	陵県	3	莱陽	2.42	即墨	19	夏津	2
莱陽	1.74	新泰	2.4	膠県	2.8	沂水	2.4	清平	19	長清	2
魚台	1.7	日照	2.4	長清	2.8	威海衛	2.2	寧陽	18	昌邑	1.96
高密	1.68	青城	2.39	新泰	2.8	即墨	2.16	※	15	恵民	1.89

典拠）**表5－1**に同じ。小数点第三位以下を切り捨てた。※は斉東・博山・浜・鉅野・文登・海陽など複数の県が該当する。

安，半島部の平度，西南部の滕県・魚台・曹県が60万市担を超え，いずれも生産量に占める移出量の割合が40～80％に達していた。また，高粱では上位２県の博興（北部）・東阿（西部）の生産量に占める移出量の割合が30％を超えていたものの，この２県分を合計した移出量は40万市担にすぎず，さらに，玉蜀黍では移出量が最高だった西北部の徳県でさえも24万市担にすぎなかった。これに対して，大豆では東部の寿光・膠県・平度の３県と西南部の単県が70万市担を超え，生産量に占める移出量の割合は単県を除くと60～65％に達していた。また，甘藷では青島市周辺の即墨県が112万市担で突出していた（**表５－３**を参照）。

さらに，移出量の生産量に占める割合が高い県を見てみると，小麦では50％以上の上位県は章邱・青城・曲阜・桓台・博平・禹城・鄒県・荏平と続き，主に津浦線周辺の西部に集中しているが，その移出量は88万市担の章邱を除くと全て30万市担以下で相対的に少ない。また，高粱では，博興（34％・約24

万市担）・東阿（33％・約16万市担）・桓台（30％・約３万市担）などが上位を占めるが，移出量はそれほど多くはなかった。さらに，玉蜀黍では最多の24万市担を移出していた徳県が移出量の占める割合でも最高の40％となっていたが，その他の県の移出量は少量にとどまっていた。これに対して，大豆では移出量の占める割合が最も高かったのは済南付近の歴城と北部の利津で，ともに80％に達していたが，その移出量は57万市担と35万市担で，移出量の占める割合が65％だった東部の寿光・膠県の190万市担・170万市担と比べると少なかった（**表５－４を参照**）。

表５－３．1930年代初頭山東省主要農産物の移出量上位県

（単位：万市担，％）

小麦		高粱		玉蜀黍		甘藷		大豆	
章邱	88(80)	博興	24(34)	徳県	24(40)	即墨	112(26)	寿光	190(65)
泰安	82(40)	東阿	16(33)	章邱	8(14)	武城	3(20)	膠県	170(65)
平度	70(40)	臨沂	8(15)	楽陵	7(6)	莱蕪	2(16)	単県	72(40)
滕県	64(60)	汶上	4(24)	斉河	4(21)	日照	1(0)	平度	72(60)
魚台	60(52)	鄄城	4(14)	済陽	1(17)	－	－	歴城	57(80)
曹県	60(46)	泗水	4(0)	寧陽	1(22)	－	－	諸城	37(35)
歴城	48(40)	嶧県	4(0)	－	－	－	－	利津	35(80)

典拠）**表５－１**に同じ。ただし，カッコ内は生産量に占める割合を示しており，小数点以下を四捨五入して切り捨てた。粟を移出した県はなかった。

表５－４．1930年代初頭山東省主要農産物の移出量割合上位県

（単位：万市担，％）

小麦		高粱		玉蜀黍		甘藷		大豆	
章邱	88(80)	博興	24(34)	徳県	24(40)	即墨	112(26)	歴城	57(80)
青城	7(77)	東阿	16(33)	寧陽	1(22)	武城	3(20)	利津	35(80)
曲阜	17(66)	桓台	3(30)	斉河	4(21)	莱蕪	2(16)	長山	20(70)
桓台	28(60)	鄒平	3(26)	済陽	1(17)	日照	1(0)	寿光	190(65)
博平	22(54)	汶上	4(24)	章邱	8(14)	－	－	膠県	170(65)
禹城	19(50)	東平	3(22)	楽陵	7(6)	－	－	牟平	20(63)
鄒県	15(50)	斉東	0.8(19)	鄒平	0(13)	－	－	平度	72(60)
茌平	14(50)	臨沂	8(15)	文登	0(2)	－	－	斉河	12(57)
斉東	6(47)	鄄城	4(14)	－	－	－	－	徳県	20(50)
城武	20(46)	滕県	2(0)	－	－	－	－	無棣	7(50)
益都	31(45)	平度	2(0)	－	－	－	－	安邱	20(43)

典拠）**表５－１**に同じ。

一方，甘藷の移出量が最も多い即墨（112万市担）だけで山東省全体の移出量の94％を占め，同県の生産額全体の26％余り（1933年は50％余り）を占めていた。そして，移出された甘藷のほとんど全てが山東省内の近隣地域で消費された[43]。

⑵　小　　麦

調査資料第13輯（1919年）では，小麦は山東鉄道沿線と滕県・禹城・済寧・兗州・泰安・曹州・臨清などで生産されているとしている[44]。同じく1919年の刊行物によれば，「山東産麦中品質良好のものは登州，莱陽産とせるも産額僅少にして其他の地方産何れも品質大差なし而して山東にては其の用途殆んど麺粉に製造せられ主要食料の原料となし」ており，小麦の主要な生産地は禹城・平原・徳州・臨城・棗荘・台荘（台児荘）だったが，「東部山東産は殆んど其地方の供給に不足し西部山東（曲阜，泰安，禹城，平原，張荘等）及安徽（懐遠）江蘇（徐州，蚌埠）河南省より鉄道及馬車或は黄河水運により済南を経て移入」されたという[45]。

さらに，『山東之物産』第７編（1922年）でも，小麦について，半島部の登州・莱陽産は品質が良く，山東鉄道沿線地方では平度を初めとして高密・膠州・安邱・昌邑・寿光・章邱・濰県・益都・長山がつぎ，津浦線の済南以北では禹城を初めとして徳州・武定・臨清・聊城がつぎ，西南部の運河に瀕する汶上・東平は生産額が多いが，魚台・済寧・嘉祥は低湿地で，豊饒な小麦の産出には適さず，品質が優良で生産額が多いのはむしろ津浦線以東のやや高燥な地方とりわけ「泗水産ハ其ノ白眉ト称」されていた。そして，山東省産の小麦は湖北省漢口付近のものに比すれば「製粉高ニ於テ小麦100斤ニ対シ６斤内外少ナ」かったが，上海品に比して品質が優良であるために価格がやや高かった[46]。

1925年の調査では，山東省における小麦の生産量は，汶上・滕県・臨沂が最も多く，鄆城・章邱・斉河がこれに次ぎ，さらに曲阜・昌楽・滋陽・鄒陽が続き，山東省の西部及び中部・南部の膠済鉄道と京滬鉄道の沿線一帯が主要な小麦生産地となっていた（表６を参照）。

あるいは，1926年の報告では，小麦は山東省西南部の汶上・鄆城・単県・

表6．1925年山東省各県における小麦の生産量　（単位：万担）

県　名	生産量	区　域	西部と東部の別
汶　上	72.1	済　南	西部
滕　県	70.3	棗　庄	
臨　沂	69.0	臨　沂	
鄆　城	58.0	荷　沢	西部
章　邱	54.83	済　南	西部
斉　河	52.3	徳　州	西部
曲　阜	45.0	済　寧	西部
昌　楽	45.0	濰　坊	
滋　陽	44.0	済　寧	西部
莱　陽	43.0	煙　台	東部・半島部
鄒　陽	42.0	濱　州	
莒　県	36.0	日　照	
寧　陽	35.0	泰　安	西部
益　都	35.0	濰　坊	
平　度	35.0	青　島	東部・半島部
濰　県	34.0	濰　坊	
金　郷	34.0	済　寧	西部
濮　県	33.6	(河南省)	
安　邱	31.5	濰　坊	
鉅　野	31.0	荷　沢	西部
即　墨	31.0	青　島	東部・半島部
牟　平	31.0	煙　台	東部・半島部
寿　光	29.0	濰　坊	
膠　県	29.0	青　島	東部・半島部
諸　城	28.0	濰　坊	
蒙　陰	28.0	臨　沂	
済　寧	25.95	済　寧	西部

典拠）参考資料「山東の小麦」(『済南実業協会月報』第17号，1926年9月5日) 2～4頁より作成。
なお，これは農業専門学校調査(1925年)による。

滕県・滋陽・鉅野・寧陽・済寧・曹県などの河南省に接する地方が最も多く，章邱・益都・昌楽・濰県・高密などの膠済鉄路沿線地方及び蒙陰・莒県などの南部地方がこれにつぎ，寿光・広饒・昌邑などの小清河沿岸地方もまた豊年に際しては他地方に移出する能力があり，年産額が1,700万石に達するとしている[47]。

このように，1920年代前半以前には，山東省における主要な小麦生産地が鉄道沿線と大運河以西の西南部だったが，1925年以降になると，山東省における中心的な小麦生産地にやや変化があったこともわかる。

ところで，小麦の作付面積の増減に直接的な影響を及ぼしたのが他作物との競合であり，主要な小麦作地だった山東省西部には20世紀前半に棉作の盛んなところも多かった[48]。

1917年の調査によると，小清河下流域の寿光の北方に位置する蒲台・利津や同中流域の博興で生産された棉花は同中流域の桓台・広饒や濰県に移出され，利津・桓台・広饒では土布を生産していた。このうち，「農村開ケ人口稠密」で「購買力甚タ高キ」桓台は，安平蓆子700万担・豆油72万斤・豆餅61.2万枚・麦粉65.5万斤を移出していたが，長山・高苑・青城などとともに周村からの貨物が約8割を占め，羊角溝からの貨物は雑穀が約2割で，羊角溝からの貨物の主なものは高粱で，年額3,000～4,000担だが，1917年は額が

やや多くなる見込みだという。また，小清河流域で桓台とともに最も重要な消費地とされていた広饒では，棉花11,000担と土布（大尺布・１丈４尺）15万匹を移出していた[49]。

また，この他に小麦の収穫高に影響を及ぼしたのが，麦稈真田の材料となる麦稈の確保である。すなわち，1917年の資料には「麦稈ノ収穫ヲ目的トスル麦ハ其刈入時期ニ注意セサル可カラス即チ早キニ失スレハ麦実ノ収量ヲ減スルノミナラス茎稈ニ小皺ヲ起シ又黴ヲ生シ易ク随テ真田ニ編製スルモ良品ヲ得ル能ハス又遅キニ失スレハ茎稈悉ク斑点ヲ生シテ之レ亦真田ノ原料タルニ適セス」，「山東農民ハ何レモ麦実ノ収穫ヲ主トシ茎稈ヲ得ルヲ副トナスヲ以テ刈入時期等ニハ多クノ注意ヲ払ハサルモノノ如シ唯沙河地方ニ在リテハ真田ノ編製ヲ目的トスル麦ハ多少普通ノ収穫時期ニ先ツテ早刈スル傾向アリ」[50]，「全熟セサル以前ニ刈取ヲナスニ起因」して「不良品少カラス」という状況を生み出していた[51]。

多くの作付作物の中から小麦を選択するのは，他作物との販売価格や収益率の差ばかりでなく，副業としての麦稈真田の生産による収益を含めて計算された結果であり，多くの農家が収入の源泉を多角化してリスクの分散を図ろうとしていたと考えられる。

⑶　高粱・粟・玉蜀黍

山東省における高粱の生産量は中国全体の15%を占め，１畝当たりの生産は全国平均の153斤に対して山東省は165斤で「標準数ヲ超過シ」，山東省の「穀類作物トシテハ小麦，粟ニ次イデ第３位ノ重要性ヲ有スル」という[52]。

調査資料第13輯（1919年）は，高粱の生産地として「満州」についで，山東省西部と河南省境を挙げているが[53]，その他の調査資料は高粱・粟に言及していない。これは，当時の日本では食糧としての雑穀に対する関心が低かったためであろうか。

また，粟と高粱は酒造原料としても大量に消費されてきた。例えば，莱州の特産物だった黄酒は付近に産する粟を原料とし，一方，高粱を原料とする焼酒は従来は濰県のみで醸造されていたが[54]，調査資料第11輯（1919年）では，濰県城内外には焼酒を醸造する「焼鍋」が20戸余りあり，「何レモ土法ニ依リ焼

酒ヲ製スルモノニシテ僅ニ地方ノ需用ヲ充タスニ止ル」[55]としている。そして，『大運河及塩運河沿岸都邑経済事情』(1921年)では，「山東省管内ニテハ済寧ノ酒最モ名アリ其ノ他沿途ニテ焼鍋アルヲ聞クモ地方ノ需用ヲ充スニ過キス」としている[56]。

さらに，高粱は飼料としても用いられ，その茎は燃料や建築用材あるいは蓆の材料にもなり，とりわけ山東省では「燃料カ一般ニ非常ニ欲乏シテヰル為高粱稈ハ殆ド唯一ノ燃料トシテ愛用サレルコレモ亦好ンデ農家ノコレヲ栽培スル一理由デアル」という[57]。

さて，粟について見てみると，『山東省ニ於ケル農作物地域ノ研究』(1940年)では，粟と小麦とは「二年作式作物型ノ冬蒔ト夏蒔ト云フ風ニ連作サレ」，粟の「稈」は牛馬などの家畜の飼料となるために農家が好んで栽培するとされている。とりわけ，陵県・臨邑・斎河・莱蕪などの諸県では単位面積当たりの生産額が小麦に比して粟が大きいために農民は小麦よりも粟を好んで栽培する傾向があるともされている[58]。

⑷　甘　　藷

青島市を含む「膠州湾租借地ハ平野頗ル少ナク」，「地味概シテ肥沃ナラス従ツテ作物ノ発育多クハ不良」だったが，青島市近郊の李村軍政署の調査(1916年)によれば，同「管下農産物１ヶ年ノ収穫」は甘藷が約半分を占め，これに小麦・粟がついでいた[59]。一方，黄県は「山東省中土地最モ肥沃ノ地方ニシテ小麦ヲ大宗トシ(全作物ノ約10分ノ７)高粱，粟，大豆，緑豆等順次之ニ次ク」とされている[60]。

なお，青島市近郊農村(青島特別市李村区西韓哥荘)に関する1939年の調査によれば，作付が最も多かったのは200～300年前から農家の主食となっていた甘藷で，約50％を占めていたが，それは甘藷の「収量が大きく人口抱擁力の大なる」ためであるという。また，甘藷は冬作物中で最も重要な地位を占め，「自作農群，自小作農群に於ては約５割，地主自作農群では３割５分を占めてゐるが，小作農群に至つては約７割余を占めてゐる。即ち，小作農群に於ては食糧たる甘藷が絶対的に大部分を占め，他の作物が極めて少いのに対し，地主自作農群の如きは甘藷の比重が減少し，大豆，高粱，粟等の如き雑穀の

栽培に進み得る余地のあることを示してゐる。」と見た上で，「地主自作農群」の「食物が甘藷重点から雑穀を加へた上級のものとなつてゐると同時に，自家消費以外に販売の余地をも有してゐる」としている[61]。

そして，1933年に刊行された調査報告書によれば，山東省内の甘藷栽培の分布状況を見ると，「黄海」に近い諸城・膠県・即墨・平度・莱陽・海陽の諸県で栽培が多く，「耕地面積に対する甘藷の作付歩合」については，青島市旧市街地域・即墨県・膠県は作付歩合が最も多く，かつ山東半島東部で作付歩合が高く，「１人当耕地面積の狭い程，甘藷の作付歩合は大となる傾向が見られ」，概して人口密度が高くなるにつれて甘藷の作付歩合が増大する傾向があるという[62]。

以上のことを換言すれば，甘藷の栽培を拡大することが零細農化の促進を可能にしているということになる。

⑸　大　　豆

大豆は「山東人ノ食糧品中，肉類ノ代用トシテ頗ル重要デ」，また，生育期間が他の作物に比して短かく，農民は好んで小麦と大豆とを連作している。その上，小麦の栽培が地力を非常に消耗するのに対して，大豆は窒素を地中に固定して地力を肥化する性質があるとされている[63]。

『山東省ノ経済的発展』(1915年)では，山東省の大豆は「品質ヨリ云ヘハ敢テ満州産ニ劣ラス故ニ外国ニ於ケル需要ノ増加ニ伴ヒ山東ノ黄豆栽培ハ逐年盛大ニ赴キ」つつあったとし[64]，また，調査資料第13輯(1919年)では，大豆は「曹州府ヲ最大産地トシ沂州，青州，山東半島各地ニ産」し，済南に出回る大豆油は「済寧，徳州等ノ産品ニシテ済寧品ハ優良品ニシテ徳州品ハ稍劣」るとしている[65]。ところが，『山東省視察概要』(1913年調査)によれば，芝罘から移出された豆粕は原料を主に「満州ニ仰キ製品ハ従来南支那，廈門，汕頭地方ニ輸出スルモノ多カリシカ近年漸ク大連豆粕ノ為ニ圧倒」されるようになったという[66]。

芝罘は豆粕の移出地で，「満州」の復州・営口付近からジャンクで移入された小形豆粕の多くは再移出され，移入された小形豆粕は１枚23～24斤だったのに対して，芝罘製の豆粕は１枚58斤だった。また，芝罘には28軒の油坊（搾

油仕事場・工場)があり，そのうち22軒は圧豆搾油機械を用い，6軒は旧式で生産していた[67]。

芝罘産出の豆粕には大形豆粕と小形豆粕の二種類があり,「其量目前者56斤(1斤160匁強)後者46斤」で，1912年と1913年の生産額は内乱のために減少して約150万個，1914年が160万個で，その移出先は福州・汕頭・潮州・芝罘付近だった[68]。

龍口では,豆粕が「毎年30万乃至40万枚の輸入を見る抑も大連との航海開けざりし間は何れも営口46斤物のみ輸入を見たりしも最近大連との交通開けし以来同地よりも輸入」され，黄県一帯で玉蜀黍・高粱・粟などの肥料に供され,元来，龍口地方では110余りの油房が豆粕を製造し，「1枚10斤ものにして其原料は羊角溝，太山，利津等より民船にて運送し来りたるものを買入れ使用」していた[69]。

1918年の報告によれば,芝罘では大豆は「登州府下の八角口を首め各地に産出せり其生産目的は主として芝罘に於ける油及粕の製造原料に其他の一部は食料に充つるにあり当地方に産出する大豆は品質劣等油分甚だ少なきを以て油房は従来之を好まず」，多くは遼東半島の安東・大孤山・荘河・貔子窩・復州・錦州・山海関から移入し，大豆油を主に汕頭など華南と日本に移輸出し,また，大豆粕の生産は13～14年前の20世紀初頭には非常に盛況で，山東省内の「産地たる膠州湾地方文登県」張家埠口・海陽県乳山口・諸城県陳家口及び宮荘口・栄城県石島・龍口地方などに「冠絶し」，営口につぎ，輸出大豆粕の約9割は芝罘市内で製造されたもので，油房(油坊)数も56軒に達したが,「日露戦争後漸次満州に油房業の振興するに従ひ」，芝罘の油房は「漸次満州に移転或は廃業するもの続出せしより大豆の輸入も亦大に減少し」[70]，油房数は1914年に30軒も減少し，さらに1916年には20軒，1917年には18軒，1919年にはついに14軒のみとなり，大豆粕の取引先は大連・汕頭・厦門・塩城などで,豆粕製造に使用する原料大豆の多くは「満州」産だった[71]。

1920年の報告によれば,安東の油房は「既往ニアリテハ専ラ豆油搾取ヲ目的トナシ豆粕ハ其副産物ナリシモ」,日露戦争後は日本商が肥料用として豆粕の輸出を試みて以来「販路ハ逐年拡張セラレ近年ニアリテハ油房ノ目的モ自然顛倒スルニ至リ豆粕製造ヲ以テ本業トナスノ感ヲ呈シ当地重要輸出貿易品ト

シテ重キヲ為スニ至」った[72]。

以上のことから，大豆は食糧として消費されるばかりでなく，その搾り粕が肥料として利用されていた。山東省では大量の大豆を東北から移入して大豆油・大豆粕を移出していたが，やがて油坊は低コストを求めて東北にも林立するようになった。

おわりに

中華民国前期山東省における農民・農村の貧困は農村経済の衰退や後進性を反映したものではなく，逆に農村経済の発展を反映していたものだったと言うべきである。山東省農村経済の発展は，農民の貧困化を伴いながら展開した。

そして，中華民国前期の山東省においても，このような貧富の格差に基づく多段階・多層的な食糧消費構造が形成されていた。すなわち，20世紀前半の山東省では，農作物のうち小麦の栽培面積が最も広かったが，小麦が大部分の都市民や農民にとって主食とはなっておらず，小麦を始めとする高粱・粟・玉蜀黍などの穀物あるいは甘藷までもが当初から販売するために生産されていた。農民自身の食糧となる穀物・雑穀類が当初から自給目的ではなく，販売目的で生産されていた。ただし，このことから，近代になってようやく自給自足的な穀物生産から商品作物生産への変化が起こったという捉え方[73]を再考する必要がある。

山東省は，華北の中でも主要な穀物生産地だったが，常に近隣の河南省・江蘇省・「満州」(東北)などから大量の穀物を移入していた。

近代山東省において食糧を移入しなければならない理由は，省内で発生した天災による不作とともに，穀物生産から非穀物生産への転作が進展していたこと，また，穀物生産が自家消費のためというよりも当初から販売を目的としていたことに求めることができる。

穀物の生産は，酒・加工食品(粉条)・手工業品(麦稈真田，蓆)などの多種多様な副産物・商品を生んでいた。

山東省では，20世紀初頭から食糧となる穀物から棉花・落花生・葉煙草な

どへ作付けが転換すると同時に，粉条の生産も急速に拡大した。こうして，不足する高粱・粟・緑豆などの穀物類を河南省・東北などから大量に移入するようになった。

穀物生産農家が自家消費分をも販売し，あるいは自給食糧となる穀物生産を犠牲にして棉花などの商品作物生産に特化していたことは，これまでは「窮迫販売」・「飢餓販売」として理解されてきたが，中華民国前期山東省農村経済の発展はこのような食糧の生産・流通・消費構造によって支えられていたのである。

注

1）東亜研究所『山東省の食糧問題（一）－膠済鉄道圏45県の食糧調査』資料丙第125号D（1940年）４頁。同書は，「中国糧食問題的総検討（上）」（中国経済研究会『経済研究』第１巻第５期，1940年１月１日）に所載された「青島済南一帯糧食的産銷」に依拠して適宜補正を加えたものであるという。

2）例えば，内山雅生「山東省における労働力移動－『満州』方面を中心に－」（野村真理・弁納才一編『地域統合と人的移動－ヨーロッパと東アジアの歴史・現状・展望』御茶の水書房，2006年）。

3）拙稿「日本の青島占領支配時期における山東省の物産調査について」（東洋文庫中国近代研究班『近代中国研究彙報』第27号，2005年３月），同「中華民国期中国の食糧事情に関する調査と研究について」（『近代中国研究彙報』第28号，2006年３月）。

4）拙稿「日中戦争期山東省における食糧事情と農村経済構造の変容」（東洋文庫『東洋学報』第92巻第２号，2010年９月）。

5）青島守備軍民政部『山東ニ於ケル主要事業ノ概況』第１編（1918年）13頁。

6）青島軍政署『山東之物産』第２編（1917年）136頁・144頁。

7）青島守備軍民政部『山東之物産』第７編（1922年）34頁。

8）同上書『山東之物産』第７編（1922年）１頁。

9）独逸人ベッツ著『山東省ノ経済的発展』交渉資料第８編（南満州鉄道株式会社総務部交渉局，1915年）44頁。

10）東亜研究所『山東省ニ於ケル農作物地域ノ研究』資料丙第106号D（1940年４月）18頁。

11）実業部国際貿易局編『中国実業誌（山東省）』第５編（1934年），20～21頁。

12）南満州鉄道株式会社経済調査会『山東省一農村（張耀屯）に於ける社会・経済事情－附.同村に於ける一農家の経済－』経調資料第95編（南満州鉄道株式会社，1935年）73～77頁。

13）青島軍政署李村出張所『李村要覧』（1916年）33～34頁・120～125頁。

14) 「芝罘に於ける切干甘藷に付て」(『通商公報』第172号，1914年12月7日)16頁。
15) 前掲書『南山東及江蘇沿岸諸港調査報告書』調査資料第10輯(1918年)114頁。
16) 「新らしき　商品青島港輸出干薯」(『山東経済時報』第7巻第10号，1924年5月30日)。
17) 青島軍政署『山東之物産』第2編(1917年)145～146頁。また，野村徳七商店調査部『青島経済事情』(1917年)94頁にもほぼ同様の記述が見える。なお，同書では，山東省産の小麦の品質は，「登州萊陽に産するもの最も佳良と称せられ青州付近のもの之に次ぎ済南附近に産するもの品質前者に比し劣る」としている(92頁)。
18) 前掲書『山東省ノ経済的発展』(1915年)43～44頁。
19) 前掲書『山東之物産』第2編(1917年)136～137頁。なお，野村徳七商店調査部『青島経済事情』(1917年)93頁にもほぼ同内容の記述が見えるが，この両書がいかなる関係にあったのかは不明である。
20) 青島守備軍民政部鉄道部『南山東及江蘇沿岸諸港調査報告書』調査資料第10輯(1918年)38頁。
21) 注15)に同じ。
22) 青島守備軍民政部鉄道部庶務課『博山事情』(1917年2月調)第72～73葉。
23) 青島守備軍民政部鉄道部『山東鉄道沿線重要都市経済事情・中』調査資料第12輯(1919年？)220～221頁。
24) 青島守備軍民政部鉄道部『東北山東(渤海山東沿岸諸港濰県芝罘間都市)調査報告書』調査資料第17輯(1919年)275頁・291頁・309頁。
25) 青島守備軍民政部鉄道部庶務課『青州事情』(1917年2月)第13葉。なお，前掲書『山東鉄道沿線重要都市経済事情・中』(調査資料第12輯，1919年？)65～66頁にも全く同じ記述が見える。
26) 青島守備軍民政部鉄道部『山東鉄道沿線重要都市経済事情・上』調査資料第11輯(1919年)250頁。
27) 青島守備軍民政部鉄道部『南山東重要都市経済事情』調査資料第14輯(1919年)17頁・59頁・63頁・89頁・127頁・131頁・189頁・192頁・241頁・252頁。
28) 青島守備軍民政部鉄道部『博山兗州間鉄道路線調査報告書』調査資料第19輯(1920年)72～73頁・84頁・95頁。
29) 「済南地方に於ける小麦出廻状況」(『通商公報』第248号，1915年9月9日)1頁。
30) 華北綜合調査研究所緊急食糧対策調査委員会『済南地区食糧対策調査委員会報告書(済南地区ニ於ケル食糧事情並ニ蒐貨対策)』(1943年)10頁。
31) 華北綜合調査研究所緊急食糧対策調査委員会『緊急食糧対策調査報告書　益都地区』(1943年)2頁・24～25頁。
32) 前掲書『山東省の食糧問題(一)』5頁・7～11頁・13頁。
33) 青島守備軍民政部鉄道部庶務課『羊角溝』(1917年6月調査)第30～33葉。
34) 青島守備軍民政部鉄道部『東北山東(渤海山東沿岸諸港濰県芝罘間都市)調査報告書』調査資料第17輯(1919年)26頁・28頁。

35) 青島守備軍民政部鉄道部「小清河ノ水運ト羊角溝(1917年8月調)」調査資料第21輯(1921年)267～271頁。
36) 満鉄北支経済調査所『山東省ニ於ケル主要農産物(棉花，小麦，雑穀)ノ生産並出廻事情』(1942年)50頁。
37) 「山東省龍口及黄県事情」(『通商公報』第47号，1913年9月11日)21頁。
38) 前掲書『山東省ニ於ケル農作物地域ノ研究』12～13頁。
39) 前掲書『済南地区食糧対策調査委員会報告書(済南地区ニ於ケル食糧事情並ニ蒐貨対策)』(1943年)6頁・8頁。
40) 「山東省に於ける飢饉に付て」(『通商公報』第436号，1917年7月23日)36頁。
41) 前掲書『中国実業誌(山東省)』第5編，1～4頁。
42) 詳細については，拙稿「近代山東省における粉条の生産から見た中国農村経済の特質」(『金沢大学経済学部論集』第28巻第1号，2007年12月)を参照されたい。
43) 前掲書『中国実業誌(山東省)』第5編，72頁・74頁。
44) 青島守備軍民政部鉄道部『山東鉄道沿線重要都市経済事情・下』調査資料第13輯(1919年)327頁。
45) 岡伊太郎・小西元蔵編『山東経済事情－済南を主として』(1919年，済南経済社)169～170頁。
46) 前掲書『山東之物産』第7編(1922年)4～6頁・35頁。
47) 参考資料「山東の小麦」(『済南実業協会月報』第17号，1926年9月5日)2～4頁。
48) 拙稿「占領時期前後における山東省綿業構造の変動」(本庄比佐子編『日本の青島占領と山東の社会経済－1914～22年』東洋文庫，2006年3月)を参照されたい。
49) 「小清河ノ水運ト羊角溝(1917年8月調)」282～303頁。
50) 青島軍政署『山東之物産』第2編(1917年)5頁。なお，岡伊太郎・小西元蔵編『山東経済事情－済南を主として』(1919年，済南経済報社)199頁及び青島守備軍民政部『山東之物産』第7編(1922年)4頁にも，ほぼ同じ記述が見える。
51) 青島守備軍民政部『山東之物産』第7編(1922年)49頁。
52) 前掲書『山東省ニ於ケル農作物地域ノ研究』26頁。
53) 前掲書『山東鉄道沿線重要都市経済事情・下』調査資料第13輯(1919年)392頁。
54) 鉄道部庶務課『黄県濰県間鉄道線路踏査報告書』経済調査(1914年)第10葉。
55) 前掲書『山東鉄道沿線重要都市経済事情・上』調査資料第11輯(1919年)370頁。
56) 青島守備軍民政部鉄道部『大運河及塩運河沿岸都邑経済事情』調査資第27輯(1921年)221頁。
57) 前掲書『山東省ニ於ケル農作物地域ノ研究』23～24頁。
58) 同上書，18頁・23頁。
59) 農商務省商工局『膠州湾現時ノ経済状態大要』商工彙纂第43号(1916年)53頁。
60) 旅順民政署『山東省視察概要』1913年調査(関東都督府民政部『山東省視察報文集』，刊行年不詳)168頁。

61）満鉄北支事務局調査部『青島近郊に於ける農村実態調査報告－青島特別市李村区西韓哥荘』北支調査資料第７輯（1939年）31頁・47～48頁。

62）興亜院華北連絡部青島出張所『山東省に於ける甘藷の栽培並に需給に関する調査』興青調査資料第82号（1942年）19～20頁。なお，同書では「本調査は済膠鉄路沿線経済調査報告総編に掲載された数字に基いて作成した第10表によるものであるが，この調査は山東省内の約半数の県に関するものであり，省内西部の多数県については調査がないので之等の県については触れ得なかつた」（19頁）と説明している。また，膠済鉄路管理委員会『膠済鉄路沿線経済調査報告総編』（1933年）の統計は1931年度を基準にして1932年度と1933年度によって補充したという（同書「序」４頁）。

63）前掲書『山東省ニ於ケル農作物地域ノ研究』29～30頁。

64）前掲書，ベッツ『山東省ノ経済的発展』60頁。

65）前掲書『山東鉄道沿線重要都市経済事情・下』調査資料第13輯（1919年）345～346頁。

66）前掲書『山東省視察概要』188頁。

67）「芝罘に於ける豆粕」『通商公報』第13号（1913年５月15日）16～17頁。

68）「芝罘に於ける豆粕生産状況」（『通商公報』第234号，1915年７月22日）７頁。

69）「山東省龍口及黄県事情」（『通商公報』第47号，1913年９月11日）25頁。

70）「芝罘地方産大豆及其製品に付て」（『通商公報』第567号，1918年11月４日）３～４頁。

71）「芝罘に於ける主要製造業」（『通商公報』第672号，1919年11月10日）24～25頁。

72）「安東地方ニ於ケル豆粕状況」（『通商公報』第733号，1920年６月７日）16頁。

73）このような捉え方は，例えば，すでに『山東省経済調査資料　第１輯　山東省業経済の発展とその破局的機構』経調資料第72編（南満州鉄道株式会社経済調査会，1935年）８～10頁にも示されている。